

俳諧資料カ一ド

年代

編者  
(筆者)

書名

備考

7 改

(下垣内蔵)

季寄  
註解

改正月令博物箋

六月部

三



# 六月部目録

△印あるハ非指  
の季と持物

○養生の法。雨の考。米の豊凶。  
○妙茶の方。其外人家重法の支え。  
○支えの定り。其目録よりあるもの。

## 六育

卦 月 調 名  
陰陽生 巽名 六丁

△小暑節 六丁 △大暑中 六丁

## 日令

此部ハ六月日の定り。其  
支えの定り。其目録よりあるもの。

△氷室 △氷鏡 六丁 △忌日の神飯 六丁

△献醴酒 六丁 △一夜酒 六丁

△勝曼祭 六丁 △富士詣 六丁

△六月會 六丁 △天取節 六丁

△製神麴 六丁 △水貯 六丁

△祇園會 六丁 △山鉾 六丁

△舟舁 △笠舁 △岩屋 △白出山 △孟宗山  
△郭巨山 △琴破山 △蟠崎山 △自來天山  
△太子山 △木賊刈山 △芝刈山 △山伏山  
△花盗入山 △天神山 △鷄舁

△御射御占 六丁 月次祭 六丁

△神合食 六丁 解舟御祭 六丁

△祇園會 六丁 竹生嶋祭 六丁

△津嶋祭 六丁 芦御興 六丁

△熱田祭 六丁 祇園時祭 六丁

△江戸山王祭 六丁 富士雪解 六丁

△嘉祥祝 六丁 嘉定喰 六丁

○神直 六丁 外宮御祭礼 六丁

△志渡寺祭 六丁 博多祭 六丁

△相國寺南無法 六丁 柳夏神樂 六丁

△内宮御祭礼 六丁 嚴嶋祭 六丁

△賀茂屋洗祭 六丁 糺涼 六丁

△鞍馬竹切 六丁 上瀬波御萩 六丁

△稻荷祭 六丁 座摩御萩 六丁

△愛宕子日詣 六丁 天満天神祀 六丁

△天橋立祭 六丁 節折 六丁

△水無月能 六丁 鎮花祭 六丁

△水無月能 六丁 道敷祭 六丁

△川社 六丁 形代 六丁

△小堀子神 六丁 茅の輪 六丁

△上賀茂水無月能 六丁 住吉御萩 六丁

△唐崎十日詣 六丁

月令

此部より六月一ヶ月日の定まるる夏とあり

△土用干 六丁 施米 六丁

△雷鳴の陣 六丁 香蒿散 六丁

△夏節 六丁 霍乱 六丁

△浚井 六丁 三伏 六丁

九夏三伏 六季 ○萬鬼行 六季

水掛合 六季 △竹婦人 △竹奴 六季

籠枕 六季 ○漆取 六季

汗流 六季 △白飯 △掛香 六季

簞 六季 △泉 △泉歌 六季

清水 六季 △清水之瀨 △清水むら 六季

雲峯 六季

時令 此部より六月一ヶ月の時 候よりなる事とす

土用 六季 △夕立 △白雨 六季

露涼一 六季 △夏露 六季

風薫 六季 △青嵐 六季

暑 六季 △日盛 六季

訪暑状 六季 同報卷 六季

涼 △涼風 六季 △納涼 六季

晚夏 六季 △夜涼 △夜果 △夜多て 六季

草木 此部より六月一ヶ月の くら木の種類とあつむ

百日紅 六季 △苧麻 六季

綿の花 六季 竹皮散 △竹皮脱 六季

烏扇 六季 △玉簪花 六季

釣鐘草 六季 △鶴麟草 六季

馬鞭草 六季 ○猫兒眼睛草 六季

剪春羅 六季 △虎尾 六季

昼白 六季 △夕白 △朝花 六季

瓢ひく 六季 南陸花 六季

山慈姑 六季 △鷺鳥州 六季

蒲穂 六丁 蘿摩 六丁

△赤草 六丁 △慈姑 六丁

△河骨 六丁 △菱花 六丁

△蓮花 六丁 △蘭の花 六丁

△荷葉 六丁 △蘭の花 六丁

△蒲刈 六丁 席草 六丁

△菅刈 六丁 △藍 六丁

△田草取 六丁 △青田 六丁

△林檎実 六丁 △早挑 六丁

△青鬼燈 六丁 △青蕃椒 六丁

△藁荷子 六丁 △凌霄花 六丁

△風蘭 六丁 汐見坂 六丁

△神馬藻 六丁 △瓜 六丁

△大豆 六丁 △小角豆 六丁

△甜瓜 六丁 △瓜皮 六丁

△白梵天 六丁 △干瓜 六丁

△熟瓜 六丁 △菜瓜 六丁

△南瓜 六丁 △南京瓜 六丁

△阿古陀瓜 六丁 △栝花 六丁

△紫蘇 六丁 △蒜根 六丁

△胡荽 六丁 △藕突 六丁

△夏切茶 六丁

種植 水とまぐ。さうねい

生類 此部より六月一ヶ月のいき物とあつたしつす

△燈蛾 六丁 △蟬の法声 六丁

△蟬脱 六丁 △空蟬 六丁

△夏虫 アキ △残蠅 アキ

△金龜子 アキ △鳥毛虫 アキ

△蒙 アキ △蜻蛉 アキ

△練雲雀 アキ △鷲雲雀 アキ

△鶴鷹 アキ △鯖狗 アキ

△海月 アキ △網 アキ

**必用**

此部は風雨占日取の世也料理献立其外重法の手記

△養飯 アキ △瀧鱈 アキ

△痛 アキ △冷索麵 アキ

△瓊脂菜 アキ △醬油造 アキ

△納豆仕込 アキ △ひし造 アキ

△奈良漬製 アキ △麻地酒 アキ

△水の粉 アキ △葛粉水 アキ

**六月之部** △印あり能譜の季と持りの入



△異名 イナ △且月 イナ △朔月 イナ △陽氷 イナ △庚伏 イナ

△水無月 イナ △鳴神月 イナ △常夏月 イナ

△異名註 イナ △且月ハル雅 イナ △六月 イナ △朔月 イナ

礼記の出の陽氷是詳なり疑ら

火旺之金火と畏る庚日心も伏せと

○季夏ハまへの夏之晩夏抄れ





極。氷の面はひらろ免す。枚の下風  
皇の嘆きよ代の幸先。山下風返  
士高。は氷凍。さ。花のほさた。山石。  
神符。山。ま。い。ぬ。夏。北。日。土。さ  
けて。こ。日。氷。室。山。東。の。山。石。修。く

④ 運 神やりの夜や雨さる。効りか。宗祇

⑤ 氷室 氷室の慈のま。白。日。夜。其。角  
石。天。事。の。ま。い。ぬ。山。石。十六

氷室 周礼ニ出氷室  
故事 夏人職 夏  
コレヲ 群臣ニ賜フトアリ又左  
傳ニモ見ヘタリ日在北陸而

藏氷西陸朝靚 忌火の御  
而出之トアリ 忌火とい不浄の火と  
飯と供と 打らるると之内膳司

より月次の御神事の食と奉る  
を大床子の御座と供し奉る  
ク。す。を。よ。ま。ひ。と  
獻體酒 毎日これと奉る

ときり今のおまごひの事うり  
⑥ 年中行司 前大納言  
身も代もまごひとをまごひ六月の  
まごひのこまごひ君がまごひく

一夜酒 今日造まバ明日ハ供  
△ア。カ。ケ。ン ときりゆへ名付るこ

⑦ 春め遊べけよハ板 京 松ヶ崎  
のひとよ酒家定 氷室祭

祇園會鉾のら 愛染家 大坂  
と祇園社参 △

⑧ 勝曼曼院首 駿河 富士詣 今日  
△勝曼曼院首 山すりあり

⑨ 除雪のつりろろを 家士宿謙亭  
晴ていもく。日。雲。リ。山。石。日記。其。角

安藝 巖鷲市 今。日。よ。り。七。月。八。日  
十日ごろより 芝居諸商入  
多く来り甚とよこハリ

三 日 天氣 雨あれが今月中  
ふりほく俗小梅雨

返り 京 高。雄。虫 本所  
千。九。日 江戸 法。息

寺谷中宗延寺 四 六月會  
法花千部執行 日 傳教大師

忌日寺々行子の坂  
枕御年高と云く有 江戸 輪

天王 五 祇園會山  
祭 日 京 江戶

牛頭天王祭 六 天貺節  
大傳馬町ニ目東 日 宋 神

帝詔して今日と天貺  
の節くつ人の不成就日 天氣 晴

ハ秋収多し 雨ふまハ秋水  
多し 風雨ふまハ米價貴し

製衣神麴 今日も製すのふよ  
一りし本州ふ委し

水貯 此日水と取淨き 晝に収め  
貯ふ一年と越しともさ

らす此水よて醋樽酉油又ハ漬物  
とさハ一年過ても懐をよと

京 祇園手水の井と開く鳥  
丸三条坊門の南ふある井

今日より十四日まで蓋とひ  
きとめ引松立しに往來の人々

水心とび 七 祇園會三社神  
ゆりもり 日 輿今日卯の下刻

本社より祇園町と四条寺町  
御旅所ふ十四日まで御出さ

○七日より十八日まで四条  
河原以夕ともみあり是と

△河原とくもとく  
祇園會々何と被ふ人の山 保友

狂 引て来るとたれい過行ふ様よ  
るや祇園の令者定離之行風

山鉾 卯下刻四条高倉より  
寺町へ出松原迄下りる

より東洞院へ長刀鉾 函答鉾月  
鉾行て自分の町々へかくる△菊水

鉾放下鉾舟鉾笠鉾山岩戸山占  
出山孟宗山郭巨山琴破山蟻蟻

山白樂天山太子山木賊川山芦川  
山花盛入山山伏山天神山雞鉾

江戸。神田天王祭。南てんま町御出の品川天王祭。両

社の御輿中の橋のうへへて行合南北へふる故行合の橋と云

日八 江戸。浅草天王祭。神田天王御帰

日九 京。北野天満宮九度。東向の観音堂より参り奉詣り。江戸

鳥越明神祭。隔年子寅辰の千住橋の上より綱を引合年豊凶と云

らふ事十日 御射之御占。今ふらふ事

神祇官の官人主上の玉射より御射く事ありん事と占ひ奏と云

より公事根 京。吉田西天王祭。北源又見と云。叡山惠徳院源信

江戸。神田牛頭天王神輿小船町御旗。今日出十二日

日十二 月次の祭。十二月の御諸神へ御

幣と奉り神今食。伊勢大神のいとく。宮と勸請

申さるゝ天子ふりく神膳と供せしむる事。年中行る。入道大納言

と多めとて今をたふるすはまら。神もわらよのどかや知るとん

京。松尾神。二十日。天氣。今日烈風と云

と邦芳譜。解齋之御粥。日の御座に大珠とて其盤一膳

を立御粥ありき土器又和布の御汁物とてつとてつと三口

免さんて御器とてつとてつと三口。京。祇園會山

船引初。堺。大寺三村。不成。日四。就日。明神祭

京。松尾神事能△祇園會。卯下刻山鉾三条京洞院

より寺町へ出四條へ下りてより西へ行自分の町々へ歸る。橋弁慶

山。八幡山。悪ふく山 宇治の合戦淨明乗る衣より

役行者山 山の名より

鈴鹿山 觀音山 鷹山 黒主山

船鉾 ○未刻神輿三座御旅所四

条寺町より西へ渡り少將井の

神輿三座ハ四条東洞院より上り

二条と西へ御城の前と大宮へ出三

条大路を御神供社へ至りなす

三条黒門通の角より 二座の神輿ハ四条を

とくふ鳥丸へ出をれより松原へ

下り西大宮迄行北へ上り三条御

神供所より至り三社の神輿一所ハ

會一のハ此所にて神祓と奉る時

奉り一十團子十音諸人よあそびむ 行列と

改め三条と東へ寺町を四条本社へ

還御 俳 しくやまて出るとん

のまゝト琴へおんまやせん

くしくり乃ハ曾呂利 江

戸 龜井戸香 大坂 難波村午

頭天王祭

近江 △竹生寫祭 日今明 尾張

○山王祭渡り初

△津島祭 日明日 十 京祇

△芦御輿△熱田祭 日

園臨時祭 勅使立あづ

奉らると公事根源みあり

とんれとも今いへては ○淨花

院垂拂 ○吉 江戶 △登山王祭

田小角豆祭 礼 隔年丑卯巳未

○赤坂冰川大明神祭 隔年

○浅州観音祭 今日びんぎの神事

○芝浦小鰯網下と今日返ハ禁制

大坂 三津八幡神事 昨 ○天王寺

講堂蓮華會 午の刻

富士雪消 今日むらう 富士

の雪消さく

○ あ 万葉

ゆのひさうつむき あ 万月の

○らむもめいこの衣うたう  
連さくはう一具夏のよの宮有栢

十六日 嘉祥祝  
△嘉定食 嘉定銭  
△かづの仁明帝の時

豊後国より白亀と奉る吉兆と  
て年号と嘉祥と改む一説は

同帝の時御代の栄と賀茂と祈ら  
せり今日吉日と御稔あり年号

嘉定と改むとあれも実記見寺  
一説は室町家の納涼の遊ふ

揚弓を射て買ふる嘉定銭  
十六文を出ると嘉定の宋の年

号十七年まで毎年銭を鑄と  
し先年毎ふとあり此元年

より銭十六 袖直  
△袖留と  
△文を用ひしと

△今日袖ととめると振袖と着  
し座鋪へ出て父母よまると人

盃をいそぎ乳母るととと盃  
事あり其後留袖を衣て月の

出ふを見るくくはよつて月  
見の祝儀ととと故実なり御

作法ハ猶 伊勢力  
△外宮の御  
△故実あり 祭礼あり

讃岐 筑前  
△志渡寺 祭多  
△十五日迄 祭略

七日 京  
△北野東向観音開帳十八日  
△相国寺閣藏法の等

持院虫干の 大坂 御霊  
△つ川夜宮祭 △夏神祭

伊勢力 安藝  
△内宮 祭  
△御祭礼 △鳥祭

八日 京  
△祇園御輿流 今日のみ  
△くよとあふ奉るの山崎

室寺観音開帳の桂川神事能  
井大二乗山門の志の執行す

江戸 四谷天王祭 観音会  
△隔年也卯巳未 日成道  
△酉亥の奎あり

の日 京 賀茂御手洗祭 座頭  
△賀茂御手洗祭 十九日あり  
△座頭 十九日あり

の納涼の清涼菴のいふ寺へあがる

狂 座次気味よくあはれ酒あり

宗増

北 天気 今日雲多うら

ハ豊年のちほく

京 △鞍馬竹切 當所の土人本堂

と西觀堂と兩所集り西方

青竹とて又切て立置本堂の近

江方觀音堂の丹波方とて山の院

妻入法事之行ひ終りて双方相違定

声と合て彼大竹とて三伐て七曲の切石

りて走りゆへ早き方と勝る夜

入て奇怪の事とも多くありを

北 大坂 △上難波祭。は云々町より

仁徳天皇の御祭礼と俗ふあり

北 不成

京 梅の尾

虫下

院御景御開帳 大坂 △座摩宮

御扱

座摩の祭の神下座へ神輿御渡り

の道筋の朝辰の下刻りてとて

本町へ出塚とて高麗橋へとて夫

より東へ大津町のおとび所へ入る

同一く申の下とて同一とて

久太郎町へ西へとて遷御あり

北 三 京 松尾神 北 四 京 △愛宕千日

詣 北三日の

夜あり

後宇多院御忌并弘法大師像

開帳 今明の松尾神事能の要法

寺虫拂

江戸 芝愛 北 五 京 黒谷虫

千

本能寺虫干の誓願寺 江戸

虫干の妙頭寺虫干

天満宮神輿舟とて豊川より一

の橋比川口まで渡御此所まで

名越の御 大坂 △天満天神宮

御扱朝巳刻

後あり

神輿二座渡らむの天神橋通を大川と下の濱側へいて難波橋まで是より舟を置き大川と並びと島おりの宮へ入る夜に遷御

### 丹後

△あまの橋立まうり  
○切通戸文殊會

### 越前

日永嶽祭 冷日  
北八日とせり  
常の祭請なり

### 北七

京 本國寺虫干  
大德寺奉書  
北八日とせり  
京嶋原

住吉祭○妙心寺方丈虫干○  
加茂水無月餅今日より晦日まで

### 北九

大坂 玉造稻荷夏神樂○  
内平野町神明同断

### 晦日

不成 天氣 風雨あまの米  
賤しめは南

風い虫 節折 竹も主上の  
をまゐる 御ふけの寸法

をとりて其やどふ折めてくいのよ  
とらとらなりよりの命婦官

主よ仰せて御 鎮火祭 部  
扱とつとひる

氏の人火を打て官城の四方の隅  
として祭事火災をふせぐが爲に

道御食祭 是も都の四方  
を思魅の他

方より来るを入まがらんを  
お路上に供物をそめる祭る

大扱 昔の百官のくく朱雀  
門の出て扱をなす麻

の葉を切て扱すらへ麻を扱  
草といひる○此水無月扱の

と説多し春より夏あつた  
春の木夏の火とて木生火と

其外も皆相生あはれは夏より  
秋よりつるは夏火秋金火尅金

と尅するを扱とらるる然も  
ども土用四季のわけて夏の土

用を以擧げす是中央土用の  
位するを以てするはくおひては

土生金と相生く。按ずる母  
九夏三伏のあつた邪鬼のこ  
くさねがこころをあらう行年の半  
を守るべし。此月抜さす候  
なり。あごの抜も夏越の畧言  
なり。つぎの詞の処は委し

⑤年中行の奇合

夏越の麻のふかきよりそへあ  
りくのほろのほろ抜さす候も

續古今 夏抜 家隆

えられてはるく麻のゆふこ川  
抜あよよよよよよよよよよん

玉葉 名越抜 兼行

月こころは水の波は夏越く  
のふまよよよよよよよよよよ

千載 六月抜 季通

りふられ麻のま枝おゆふけて  
えよよよ月のに抜をそよよよ

夫木 夏神樂 公朝

河抜忘のふりてくへあつて  
神の妹も神糸をそよよ

堀川百首 河夏抜 成行

以後川小夜文わろり麻のまの  
よる御のまよふかよふ秋のあ

同 荒和抜 仲実

ハ百多神もまよふかよふ秋のあ  
くよよよあよよよのまよふくつれを

○荒和ハあろり神和つあをひる

詞 秋の麻の糸若糸と世六

海抜繩川流 浪色 白月 聖村 國

合抜川ハ夏抜ハ冬抜ハ夏結糸糸水月

後ハ麻のまよ流 ちのむと世とるん 抜ま

△夏抜 後の荒和時ハ冬代りる ちよよ

連 抜さる水ハんのらをりや 宗祇

誹 冬よれに抜そ夏はひんや 小長

ある守さくらの靴やえ神糸 其角

狂 朱の秋と夏はひのさうへはの

美中長のをひすつと 養路守宗増

川社 夏抜小川辺ハ棚と構  
へて神をこころるなり

形代 ハ撫物。御抜さる人形と作  
△右人形とるを身のま

んと抜ひ川 こゝろ 小蠅ふし神 の

とく悪邪多きといふ日本記の  
いづ是れ夏の熱邪といふなり

⑤ さそふまきありし神もさそふて  
今日ハ名細のくくくといふなり

茅汁輪 午頭天王燕民將  
未又敷へぬ遺風

疫病くまう時是とかれ災難連  
非振神と結んで居る茅汁神ハ 翁詔

京 ○ 上加茂氷無月能  
○ 建仁寺泉涌寺布薩戒

江戸 ○ 浅草寺芭講  
△ 佃島住吉の御被

大坂 △ 住吉御被 所々より移り物  
櫛の挑灯ころくのむらに

手とけりて渡る午の刻頃よ  
こゝろ鷹野師社人社僧神

馬等かど限りもなく次第の  
列を守りてころ四社の神輿

と祭奉る社務ハ車にて反橋  
の本小立る神輿一社七度

北濱ハ出奉り潮りてりい  
ころのいをれより堺の宿院の

御旅所へ遷幸あり神人のつと  
と奉り夜よ入神輿住吉へ遷幸

其節堺より送る者住吉御人  
火ととも夏昼のとは是と火替云

⑥ 狂 儀儀も神くは夏のともひりて  
令と冠せぬ

近江 唐崎千日  
黍り御被

月令 此部ハ六月三日  
の定よりころ事と記す

土用干 △ 虫干 △ 虫拂の書衣等  
の中は白奥と去之故云云

⑦ 非 嫁今時の枕を土用が 其角  
接腦小世をさうこの後うか

京 妙心寺虫干 ○ 天龍寺虫干  
○ 大徳寺虫干の定日

○ 大徳寺虫干の定日

**施米**

山寺の僧は米塩を乞ふ  
公より下さる○年中行事

この月のきふよりあてあられず  
君のちんごきの秋のこのときは

**雷鳴之陣**

かきこりの声  
三度高くさ

色は大将以下近衛の次將迄  
弓箭と帯し御殿は孫廂は

候して天子と守護し奉る  
と公事根源寺小見へり

**香薷散**

暑氣の頃専ら  
用る菜方なり

暑氣のわづらうとらうとらうと治を  
○香薷散を採りて書は其書

**夏節**

小兒の頭面は無名  
の腫物りりるをいふ

**霍乱**

病の名は夏瘧  
霍乱妙菜陳皮生姜

水煎用也のめりの根より○芦  
の葉とえり吞てより○たでの

実香薷散とてのしべり○又法  
のしと移りやをふつてより

**浚井**

曝井ともかく△井戸  
替の事は新井の義

あて夏日井と新よとれは瘟病を  
やますと見へりむうへ此月

井水と替しとまり合へ七月  
よ井をいさへふことなり

**三伏**

三庚閉日ともいふ夏至  
の後第三の庚は日を

初伏第四の庚を中伏立秋の  
後最初の庚を末伏といふは

くの本篇博

**占候**

三伏の  
内西北

の風あれば極月氷り多し○三  
伏よりと熱すれば冬雪おとし

○三伏の内嫁妻とれべありし  
○木と伐はより虫むむとれし

**九夏三伏**

九夏の夏九十日  
へ三伏の詠は記せ

萬鬼行

後漢の時伏日よハ  
鬼出るとて盡日門

戸を閉めあひハ湯餅を作りて  
辟鬼と名づくところの秦

のくたやいろはを分りて祭  
をさし虫災をぬせごとし

水掛合

夏戯まよ水辺杯よ  
て水かけ合とるといふ

竹婦人

竹奴脚馬抱箆と  
べて竹の箆といふ

或ハ足とりをせきとて涼  
しかりしむふふのあり

俳諧よ吹の先ひくハ婦人勝英  
たさ翁や妻がてきのみくふ其角

箆枕

竹とりて是とつふ  
竹細工の名地所を出せ

漆取

うふし乃樹ハ中  
心黄ぬしてかき

水小値て齧てかじ刀弁  
と以樹の皮小切目切らけを

しとおけハ白汁滴り出  
後衰して黒色なり此汁と

あつてこそとて取るなり  
近国よハ大和國吉野及ハ

多く此職あり組ハ篋小  
取る物ハ是湿漆なり塗

りの不用るハ奥州羽州下  
野より出るハセシメウル

シとのハ是上品なり吉野ハ  
銀朱ふ合とると用也越前

至て下品なりうりところハ  
日本と上品とハ唐土の塗

ハともなごよめハ故ふり  
くへ渡るととハ夥し

○此実より蠟をとるとあり  
りりり上品とハ此の蠟ハ

死鳥鴨涼し

此外月露なる  
ぐけても涼し

とともハ夏の季よありあり  
○俳諧よハ夏の振の下涼し自成

船遊

⑥大名の我味なるや  
舟あそび 季州

汗疣

熱拂瘡ともいふ。夏  
身うちよこぬる物

その切口くくさうしてより。又

つぎの土紙粉ぬりてつけてよ

し。又天麻粉をばちて妙く

白袋 △掛香 ⑥掛香や襟ぬ  
いさやる妻の衣 青が

⑥ △在 竹のあしうる庭より暑中  
下子かいらの中よとぬれそ 久清

簾 たひら  
是とあそて暑とこる

泉 いづみ  
△泉殿 龍殿。泉とハ水の流をふ

たてる家之殿とハ家の事。龍殿  
瀧をこるなま瀧のとはふ建る殿に

⑤ 堀川百首

永緑

弦み子の袂とく成ゆい  
いづも小秋はとむるやあらん

續後拾 泉辺避暑 公通  
若のむと若弦をさるをさよ

雪玉 水風晚来 頭季  
下はの夏もあやなざうけり

散木 對泉忘暑 家経  
下るふ思ふのあはれあうや

月清 對泉述懐 俊頼  
あふこの風をわける人もあ

玉吟 深山泉 家隆  
身はうれふ志とあうたる歎をい

雪五 樹陰翫泉 贈左大臣  
玉井の水もえやの清光森

松子の雲より清あむとよよい  
任されよけれふ乃下るあ

ワダチヒとらふ秋はさびたり

玉吟 夏向泉

家隆

清くはあききりる清くあゆりて入  
神水とてささりて下を

山家 向泉待友 讚岐

即ちうのこいも舟のあそびは  
なかるも新も君をまうらん

詞増し。湧く。湧る。出る。洩る。松

陰の清み。若くはまきこふる。万代と程ひ

れり。蟻。本陰。山陰。谷。庭。あせ

てことあかた。またくろあひ。きぬ

とそせ。りりある液。いをえふあ

りりあ。かくとくふあひのしん

運 本北より流るはとくあうを宗祇

言く人の心をあふる泉うふ絶巴

狂 友は目のあつあつと柳ふ泉しを

よか結んでふあひの祝たる

清水 △清水が瀬 △清水いぎん

△清水ぞく △清水くむ

○石間 △ある清くきりる水と

云源はまきりてあうむとぶら

手も汲きり清水汲も同じ

いせせ入せきとむらあ

いふうとてとせせとむらあ

きよあもまきと入相あひをせあ

縁の清み結ひつるまに仲実

連 清き結ひあう清きあふ泉祇

非 清きあふとつとく清きあふ 池魚

あふとく清きあふとつとく清きあふ 荷香

雲峰 夏の末は白雲とて

のわけてもひれあう

時の間よりつくと替はる

午より後か多し此雲うく立

のかり山よりはききて下の根と

手次第か山下よりるんがやそ

クをよとあう

夏雲多奇峯 洞明が詩より

新題林 為綱

西あさる日新あつと大あつた

あつたのいひたれいあつた





を空より出く雲のやうなるれども  
 左ふちより水氣と陽氣とを以てしり  
 のぶとく次第に立上り下より  
 段々上ると時の白き氣集りて  
 山ぎの所次第に黒きがらふ是  
 によく水氣の多く上りにより  
 てるれの雨より或は白雲り中  
 天より高く立上らざ横へかび  
 けり雨より其故の下よりつぎ  
 上も氣止むにより上りし水氣も  
 陽氣と散らるゆへ横へるびく  
 かり山ぎの根とくともふりさ  
 るも上り水氣つきたる故なれが  
 つぎ上り氣なきふり上り上り  
 たるも散りてふび山林多と  
 野の水湿多といふり度なく  
 夕立とるなり山ありても元山の  
 水氣あり富士山など山のふり  
 より中途にその材木ありにより  
 地中より水氣上り雲をかへる

ともくきふ雲あり山上のまが  
 山ありによりてその夜電光すけ  
 其方角より雨ふると是も水氣  
 の上り水氣上るといふも陰を  
 かりあり上りてありて陽み  
 むされて陽氣の如く上る其陽  
 氣発出する時ひくく火のよ  
 りを見らるべしけり黒くとく  
 ども火燃るどめて多くをもちを  
 本性をあらわしてあり光も陽  
 氣の上りけりれども故に此も  
 ぶ方より上りての烈しき時直  
 りよりゆりたりなる時の翌日ふり

新古今

公経

あすする春のまことあはるびま  
 一しむむむむむむむむむむ  
 千首 夕立早過 後拍原院  
 ありかたやたの時のまらみ  
 玉葉 旅夕立 伏見院  
 糸川しるしむむむむむむむむ

神もほのめんと衣う務らふ  
續古 村夕立 知家

野より火のけりうを飾る夕立の  
くもはさむらうをしら乃山りく  
玉葉 行路夕立 基氏

とゆるべき陰まけさるるくくと  
よれてそゆるん夕立ら乃雨

詞 雨の初。風さかく。雲はよよる  
ばま。あかむ。虹のひの夕立。いそ

が里人。まもふ。あかむ。さむ村  
を。せくぞ。かきく。新。新。新。新。

雨れあし。け里  
運 浮橋とつや夕立。天は元宗牧

非 夕暮は花のゆき。堂其角  
ら夕暮や内着なま。おれを。全

狂 中よまのあかむ。子迷み  
うけまぐん。社会。常林

詩 白雨五字對句 同上

竹怜新雨後 万壑驚雷起  
ユラダチタケスミシ カミナリ山ニヒキ

山愛夕陽疇 千峯鳴雨過  
ヨラ日ノヤニノクイ 山くツフツテユク

詩 白雨七字對句 詩礎

雲開星月浮 山殿 喧雷霆  
山上ノコテンホレノヒカリリ ライノコエ

雨霽風雷繞 石壇 抱殘虹  
アスハレテフウライニセキダシラ イダサシラウツ

詩 白雨之詞 唐 韓偓

猛風飄電照 雲生 風ハゲレク  
モウフク ヒヤウテンコクウセウヌ フラマツクロ

一ナリ 雲々 高林 簇雨聲  
タルグ セウクタルカウリン アツルウセイト三

ハサツト 雨フリ来リタツニ夕立ヨヒサレク  
ノケレキヲミルガゴトク作りタリ 夜久

雨休風又定 夜マデフツテ雨モヤミ  
アキヤンテヒセニタヒカレカセモオダヤカニナツ

露 涼 涼の字を加へて夏とす

夏露 夏の露とよむは



狂<sup>キヤウ</sup>多<sup>タ</sup>りしも百倍のつぎを天を  
身<sup>ミ</sup>ふらりる日の私<sup>シ</sup>であるは是燕

日<sup>ヒ</sup>成<sup>ニ</sup>立<sup>ツ</sup> (俳) 日<sup>ヒ</sup>此<sup>コノ</sup>忘<sup>ワスレ</sup>ハ牛<sup>ウシ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
地<sup>チ</sup>孫<sup>ソノ</sup>ヤ日<sup>ヒ</sup>の夏<sup>ナツ</sup> 井<sup>イ</sup>雨<sup>アメ</sup>

詩<sup>シ</sup>夏<sup>ナツ</sup>晝<sup>ヒル</sup>偶<sup>ニ</sup>作<sup>ス</sup> 長<sup>チヤウ</sup>孫<sup>ソノ</sup>佐<sup>サ</sup>輔<sup>ボ</sup>

南<sup>ナン</sup>州<sup>シュウ</sup>溽<sup>ジュ</sup>暑<sup>ショ</sup>醉<sup>サイ</sup>如<sup>ニ</sup>酒<sup>シュ</sup>隱<sup>イン</sup>几<sup>キ</sup>熟<sup>ジュク</sup>

眠<sup>ミ</sup>閑<sup>ケン</sup>北<sup>キツ</sup>牖<sup>ヨウ</sup> 暑<sup>ショ</sup>氣<sup>キ</sup>苦<sup>ク</sup>シム堪<sup>カン</sup>ガ多<sup>タ</sup>ク酒<sup>シュ</sup>

ヒ<sup>ヒ</sup>ニキワタシテ凡<sup>ニ</sup>ニヨレバ神<sup>シ</sup>氣<sup>キ</sup> 日<sup>ヒ</sup>午<sup>ヌ</sup>

獨<sup>ドク</sup>覺<sup>カク</sup>無<sup>ク</sup>餘<sup>リ</sup>聲<sup>セイ</sup>山<sup>サン</sup>童<sup>トウ</sup>隔<sup>カク</sup>竹<sup>チク</sup>敲<sup>カウ</sup>

茶<sup>チャ</sup>臼<sup>ウ</sup> ヒル頃<sup>ニ</sup>寐<sup>メイ</sup>々<sup>々</sup>ワツテサ<sup>サ</sup>メタレハト

子<sup>コ</sup>ノ茶<sup>チャ</sup>ヲヒク臼<sup>ウ</sup>ノ音<sup>ネ</sup>ノミ竹<sup>チク</sup>ヤツラ

ハダテシトナリニキユルハカリナリ

狀<sup>キョウ</sup> 訪<sup>ホウ</sup>暑<sup>ショ</sup>日<sup>ヒ</sup>起居<sup>キョ</sup>文<sup>ブン</sup> 左<sup>サ</sup>ハ尺<sup>シツ</sup>牖<sup>ヨウ</sup>ナリ

不<sup>フ</sup>快<sup>カイ</sup>大<sup>ダイ</sup>暑<sup>ショ</sup>人<sup>ニン</sup>多<sup>タ</sup>ク多<sup>タ</sup>ク多<sup>タ</sup>ク

熨<sup>ウ</sup>暑<sup>ショ</sup> 逼<sup>ヒツ</sup>人<sup>ニン</sup> 審<sup>シン</sup>

涉<sup>セツ</sup>清<sup>セイ</sup>福<sup>フク</sup>之<sup>シ</sup>如<sup>ニ</sup>波<sup>ハ</sup>淺<sup>セン</sup>也<sup>ヤ</sup> 多<sup>タ</sup>快<sup>カイ</sup>

寫<sup>シャ</sup>水<sup>スイ</sup>園<sup>エン</sup>一<sup>イツ</sup>持<sup>チ</sup>備<sup>ビ</sup>多<sup>タ</sup>免<sup>メン</sup>之<sup>シ</sup>

謹<sup>キン</sup>獻<sup>ケン</sup>某<sup>ケイ</sup>物<sup>ブツ</sup>

毫<sup>コウ</sup>以<sup>ニ</sup>暑<sup>ショ</sup>中<sup>チュウ</sup>涉<sup>セツ</sup>為<sup>ニ</sup>回<sup>クワ</sup>之<sup>シ</sup> 多<sup>タ</sup>快<sup>カイ</sup>

聊<sup>リョウ</sup> 訪<sup>ホウ</sup> 問<sup>モン</sup>

而<sup>ニ</sup>已<sup>シ</sup>

尺牖 各替上中下

熨<sup>ウ</sup>暑<sup>ショ</sup>逼<sup>ヒツ</sup>人<sup>ニン</sup> 赤<sup>セキ</sup>日<sup>ジツ</sup>流<sup>リウ</sup>金<sup>キン</sup>の溽<sup>ジュ</sup>暑<sup>ショ</sup>

鼈<sup>ヘビ</sup>蒸<sup>セイ</sup>の炎<sup>エン</sup>令<sup>ニ</sup>灼<sup>シヤク</sup> 審<sup>シン</sup>動<sup>ドウ</sup>定<sup>テイ</sup>云<sup>クニ</sup> 起<sup>キ</sup>

居<sup>キ</sup>平<sup>ヘイ</sup>安<sup>アン</sup>の興<sup>キョウ</sup>起<sup>キ</sup>遲<sup>チ</sup>寧<sup>ネイ</sup>の平<sup>ヘイ</sup>生<sup>セイ</sup>之<sup>シ</sup>

休<sup>キウ</sup>暢<sup>チャウ</sup>居<sup>キ</sup>止<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>祥<sup>シャウ</sup>多<sup>タ</sup>快<sup>カイ</sup>慶<sup>ケイ</sup>幸<sup>カウ</sup>の愉<sup>ユ</sup>

然<sup>ゼン</sup>の欣<sup>キン</sup>躍<sup>ヤク</sup>の健<sup>ケン</sup>羨<sup>セン</sup> 謹<sup>キン</sup>獻<sup>ケン</sup> 以<sup>ニ</sup>投<sup>トウ</sup>

然<sup>ゼン</sup>の欣<sup>キン</sup>躍<sup>ヤク</sup>の健<sup>ケン</sup>羨<sup>セン</sup> 謹<sup>キン</sup>獻<sup>ケン</sup> 以<sup>ニ</sup>投<sup>トウ</sup>

然<sup>ゼン</sup>の欣<sup>キン</sup>躍<sup>ヤク</sup>の健<sup>ケン</sup>羨<sup>セン</sup> 謹<sup>キン</sup>獻<sup>ケン</sup> 以<sup>ニ</sup>投<sup>トウ</sup>



真瓜マウカヲツカフトキハ園瓜ウヅマ氏黃瓜ウヅマ氏カク  
べシ異名ニハ玉質タマシク氷漿ヒヤシク黃花ウヅマト

アリ清明ウツクミ東陵トウレイナドハ瓜ノ出ル所ナリ  
西瓜ウヅマノイテ綠蔓キナメトツカフアリ○納涼ナツミ云

襲フク清風ウツクミ橋下ハシノ流泉リウセン又ハ披襟ヒキ林下ハシノ  
ナド、青アヲズレ暑ヲ避ルニ蓮葉レンエフヲ取リテ

コレヲ杯ハシトシテ酒盛サケスルヲ飲碧筒ヒキト云  
棚テヲ結ムステ日ヒヲ蔽カサラスラ張蓋テトイフ

涼スズシ 涼風ウツクミ 涼スズシ 夏ナツトす  
△涼スズシ 夫木ツキ 野亭ノテイ夏朝ナツアサ 為兼ナラシメ

約ツク風カゼヨシヨリ暑ナツノ涼スズシノヨリトす  
そことともワカぬ母ハハのよどしと

嘉元カゲン千首チノウ 山家ヤマカ夏ナツ 為相ナラシメ  
涼スズシトイフくもワカぬヨリトす

古今コキン六帖ロクテウ 公朝キウチウ  
わんワンとくわクワワク人君ヒトノミコの風カゼは

夫木ツキ 樹陰ジュイン如秋ニホク 仲正ナカマサ  
ひふ然ヒツクハほぬくう人のむくし

非ヒ 涼スズシトすくしとくえぬくし  
そのくひつらう秋アキふとくふ

排ヒ 涼スズシトすくしとくえぬくし  
涼スズシトすくしとくえぬくし

涼スズシトすくしとくえぬくし  
涼スズシトすくしとくえぬくし

納涼ナツミ 新古亭シンコテイ 惠慶ヱケイ法師ホフシ  
我音ガオンの方面ウチノカタふとくえぬくし

同 太上トウジョウ天皇テンノウ  
山里サンリの家ノは雨アメを云イハとくえぬくし

拾玉シツギク 毎日マウジツ納涼ナツミ 慈鎮ジジン  
とくえぬくしとくえぬくし

建保ケンポ百首ヒャクウ 樹陰ジュイン納涼ナツミ 定家サダメカ  
とくえぬくしとくえぬくし

家集ケシツ 山陰サンイン納涼ナツミ 梶井カキイ宮ミヤ  
とくえぬくしとくえぬくし

世ヨは松マツとかりへぬみ静シズカたはふ  
刃ヤをおくくしのくげを涼スズシと

とくえぬくしとくえぬくし

とくえぬくしとくえぬくし

月清

松下納涼

後京極

蟬の羽ふとれても家おれ本うくれて  
秋を中とせよ巻乃すまひを

續千載 森納涼 為氏

さしこいなきをけうけあられたり  
秋風らうた衣子のそり

詞序 月 袖 衣子 水邊

山陰 野もも山陰納涼まど出たり

よまきうぬ秋風かふもも 山下水  
苔ひる。遊。果。玉ぞ 静い

泉清あ。暑り水。まう。あ。暑う秋清  
あましとく久。暑涼。結ぶ子に

あまをこまき 涼し松陰 本法 玉ぞ  
は家 風かふはあまをこまきあやめ

蓬草 山風 夕風あ結ぶ子うら  
松風 本法 月 月 秋 秋

あまをこまき 涼し松陰 本法 玉ぞ  
は家 風かふはあまをこまきあやめ

水辺つる。月お下色。松かげ。秋の松  
まぐさ川 風水 秋 涼

すり 雨 蟬 本の下風あまをこまき  
あまをこまき 涼し松陰 本法 玉ぞ

あまをこまき 涼し松陰 本法 玉ぞ  
は家 風かふはあまをこまきあやめ

雲連海氣琴書潤

水殿涼

風帶潮聲枕葦涼

青琅玕

沙界樹涼晴作雨

看衣巾

石渠泉聲暗流水

涼風來

何以前煩暑端居一院中

眼前無

詩 暑之詞

長物窗下有清風

為空室

與人同

晚夏

秋近

草木

百日紅

苧麻苧

麻

繩

スイトツル

セイロウカン

スミドノ

イキニ

カゼキタル

イキニ

カゼキタル

眼前無

**麻**

△櫻麻花の柄は似たりあり  
△夏引の糸のあさの事なり

△麻刈の俳ふ麻刈の夏とよ  
異名漢麻。黄麻。麻仁。油は制と  
麻の皮とてたて糸よとるこ

◎夫木

寂蓮

賤の女がふとくしとて居る  
さうあさすうあさの下風

土御門内大臣

夫木  
かうさるあさの立枝のさう  
えん味奈よるけい

◎俳朝起の妙りまその妙をさし徳元  
◎麻宗祇

◎和名かむ。真苧  
かうその葉のさう

花青さ穂をさるとの出羽最上  
の産より奈良晒を織るもの

是より東国西国共なく植も畿  
内東南より瓜うて麻と作る

**綿の花**

ひかりは穀皮と  
りて衣服とす

是を木綿とらふ是紙のさう  
今衣服は織るふ木綿といふ  
古名と用ひらるる神人の用  
る木綿たむれも古来の言なり

中世民用専ら麻布と用より  
今の州綿は桓武帝の朝は異  
国より傳り唐土より宋乃  
末とて植る本朝より二百年

中絶したるを文禄年中に  
種を得て諸国に植る○多田  
綿花黄も実白く糸よりけよく

尤可けきも少なり今これを  
とへどの蝦手綿葉は深き  
さみあり白花あり桃大きく白  
然まも桃少なり○神樂綿

花白あり黄るるありさう  
生す神巫の持つ所の鈴花と



燭臺のこたた故。燈臺艸と云野は多く自然と生さるる

剪春羅 春羅。漢宮春。眼皮の俗字あり

花の大きき錢のぶくし

狂人のふりつる所都はまると

虎尾花 花白く虎の尾の如くふ似る

書顔 鼓子花 旋花

俳 空教は米搗こむ衣之芭蕉

狂 孝子やの屋上りどもふかそと

夕顔 壺盧 瓠瓜 朝の花

六月頃白き花用く昼は赤も夕方は咲く故は名づく

夫木 定家

つらするを方人の神うとよあゆふし移さゆふふれむ

首 垣夕白 為尹

か松さりの竹乃わ経末うて

詞 白雲 あゆぐるある。それあてる。根。矮く高難。光りもある。咲て

連 夕白のあざかしせる法は宗春

俳 夕白や一白の守花の衣其角

夕白のまゆけき垣根うか宗養

夕白や一白の守花の衣其角

幸結白花了 松虫声不去

寧<sup>ニシロ</sup>辞<sup>ジ</sup>青<sup>アヲ</sup>蔓<sup>マン</sup>除<sup>ジュ</sup> 暮<sup>ホ</sup>雀<sup>シヤク</sup>意<sup>イ</sup>何<sup>ニ</sup>如<sup>カニ</sup>

瓢<sup>ヒョウ</sup>。味<sup>チ</sup>甘<sup>カン</sup>と故<sup>コ</sup>苦<sup>ク</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>は對<sup>タイ</sup>てかん<sup>カン</sup>ひ<sup>ヒ</sup>やう<sup>ヤウ</sup>と名<sup>ナ</sup>づく形<sup>ケイ</sup>色<sup>シキ</sup>を看<sup>ミ</sup>

瓢<sup>ヒョウ</sup>の<sup>ノ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>物<sup>モノ</sup>ハ長<sup>ナガ</sup>ふ<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>べ<sup>ベ</sup>ま<sup>マ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>浪<sup>ナミ</sup>花<sup>ハナ</sup>木<sup>キ</sup>津<sup>ツ</sup>難<sup>ナニ</sup>波<sup>ハ</sup>今<sup>イマ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>任<sup>ニ</sup>吉<sup>キチ</sup>

ち<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>に<sup>ニ</sup>作<sup>サス</sup>る<sup>ル</sup>かん<sup>カン</sup>ひ<sup>ヒ</sup>やう<sup>ヤウ</sup>ハ皆<sup>ミナ</sup>炭<sup>ツグ</sup>斗<sup>ト</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>り<sup>リ</sup>一<sup>ヒト</sup>名<sup>ナ</sup>盒<sup>コウ</sup>盤<sup>パン</sup>蒜<sup>ソウ</sup>葫<sup>フ</sup>

蘆<sup>ロ</sup>と云<sup>イハ</sup>かん<sup>カン</sup>ひ<sup>ヒ</sup>やう<sup>ヤウ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>ハ瓢<sup>ヒョウ</sup>と<sup>ト</sup>かく<sup>ク</sup>べ<sup>ベ</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>ハヒヤウ<sup>ヒヤウ</sup>の<sup>ノ</sup>音<sup>ネ</sup>小<sup>コ</sup>ま<sup>マ</sup>

浮<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>意<sup>イ</sup>こ<sup>コ</sup>ろ<sup>ロ</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>酒<sup>サケ</sup>器<sup>キ</sup>小<sup>コ</sup>制<sup>セイ</sup>す<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>ハ木<sup>キ</sup>ハ絶<sup>ツツ</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>

多<sup>タ</sup>り<sup>リ</sup>や<sup>ヤ</sup>か<sup>カ</sup>く<sup>ク</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>て<sup>テ</sup>酒<sup>サケ</sup>器<sup>キ</sup>を<sup>ヲ</sup>小<sup>コ</sup>制<sup>セイ</sup>す<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>ハ知<sup>チ</sup>べ<sup>ベ</sup>り<sup>リ</sup>

千<sup>セン</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>救<sup>クウ</sup>力<sup>リキ</sup> 新<sup>シン</sup>千<sup>セン</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>の<sup>ノ</sup>土<sup>ツチ</sup>用<sup>ヨウ</sup> 中<sup>ナカ</sup>ふ<sup>フ</sup>じ<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>て<sup>テ</sup>不<sup>フ</sup>

寸<sup>スン</sup>河<sup>カ</sup>内<sup>ナイ</sup>根<sup>ネ</sup>津<sup>ツ</sup>は<sup>ハ</sup>多<sup>タ</sup>し<sup>シ</sup> 伊<sup>イ</sup>勢<sup>セイ</sup>より<sup>ヨリ</sup>出<sup>デ</sup>で<sup>デ</sup>し<sup>シ</sup>味<sup>チ</sup>お<sup>オ</sup>ろ<sup>ロ</sup>く<sup>ク</sup>

苦<sup>ク</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>。瓢<sup>ヒョウ</sup>葷<sup>コン</sup>の<sup>ノ</sup>類<sup>ルイ</sup>と<sup>ト</sup>一<sup>ヒト</sup>類<sup>ルイ</sup> 是<sup>コト</sup>を<sup>ヲ</sup>別<sup>ベツ</sup>種<sup>シュ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>チ</sup>は<sup>ハ</sup>じ<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>

夫<sup>コノ</sup>木<sup>キ</sup>は<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup>ろ<sup>ロ</sup>く<sup>ク</sup>を<sup>ヲ</sup>好<sup>コト</sup>む<sup>ム</sup>瓢<sup>ヒョウ</sup>の<sup>ノ</sup>味<sup>チ</sup>は<sup>ハ</sup>じ<sup>ジ</sup>と<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>

商<sup>ヤマ</sup>陸<sup>シヨク</sup>花<sup>カ</sup> 花<sup>ハナ</sup>白<sup>シロ</sup>赤<sup>アカ</sup>あり<sup>アリ</sup>白<sup>シロ</sup>花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>も<sup>モ</sup>白<sup>シロ</sup>

山<sup>サン</sup>慈<sup>ジ</sup>姑<sup>コ</sup> 俗<sup>ソク</sup>黒<sup>クロ</sup>く<sup>ク</sup>入<sup>イ</sup>り<sup>リ</sup>花<sup>ハナ</sup>淡<sup>タン</sup> 赤<sup>アカ</sup>色<sup>シキ</sup>此<sup>コノ</sup>根<sup>ネ</sup>解<sup>ゲ</sup>毒<sup>ドク</sup>丸<sup>ワル</sup>也<sup>ナリ</sup>

鷺<sup>ササ</sup>草<sup>コウ</sup> 花<sup>ハナ</sup>白<sup>シロ</sup>く<sup>ク</sup>鷺<sup>ササ</sup>又<sup>マタ</sup>似<sup>ニ</sup>たり<sup>リ</sup> 連<sup>レン</sup>鷺<sup>ササ</sup>艸<sup>ソウ</sup>ハ葉<sup>エフ</sup>大<sup>オホ</sup>なり<sup>ナリ</sup>

花<sup>ハナ</sup>白<sup>シロ</sup>く<sup>ク</sup>鷺<sup>ササ</sup>十<sup>ジュウ</sup>羽<sup>ウ</sup>飛<sup>トビ</sup>人<sup>ニン</sup>形<sup>ケイ</sup>に<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>たり<sup>リ</sup> 排<sup>ハイ</sup>は<sup>ハ</sup>た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>や<sup>ヤ</sup>産<sup>サン</sup>の<sup>ノ</sup>咽<sup>ノド</sup>と<sup>ト</sup>接<sup>ケツ</sup>して<sup>シテ</sup>由<sup>ユ</sup>光<sup>クワウ</sup>

蒲<sup>フ</sup>穂<sup>ホ</sup> 香<sup>カウ</sup>蒲<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>穂<sup>ホ</sup>の<sup>ノ</sup>形<sup>ケイ</sup>鋒<sup>ホウ</sup>に<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>たり<sup>リ</sup> 故<sup>コト</sup>蒲<sup>フ</sup>鋒<sup>ホウ</sup>く<sup>ク</sup>は<sup>ハ</sup>り<sup>リ</sup>

蘿<sup>ラ</sup>摩<sup>マ</sup> 花<sup>ハナ</sup>紫<sup>ムラサキ</sup>白<sup>シロ</sup>色<sup>シキ</sup>秋<sup>アキ</sup>実<sup>ミ</sup>と<sup>ト</sup>生<sup>ナ</sup>じ<sup>ジ</sup> 花<sup>ハナ</sup>紫<sup>ムラサキ</sup>花<sup>ハナ</sup>の<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>生<sup>ナ</sup>す<sup>ス</sup>

綠<sup>リョク</sup>豆<sup>トウ</sup> 花<sup>ハナ</sup>黄<sup>ワウ</sup>也<sup>ナリ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>や<sup>ヤ</sup> 實<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>ふ<sup>フ</sup>生<sup>ナ</sup>す<sup>ス</sup>

茨<sup>ソウ</sup>實<sup>ジツ</sup> 實<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>ふ<sup>フ</sup>生<sup>ナ</sup>す<sup>ス</sup> 赤<sup>アカ</sup>

草<sup>ソウ</sup> 水<sup>スイ</sup>草<sup>コウ</sup>の<sup>ノ</sup>正<sup>テイ</sup>字<sup>ジ</sup> 慈<sup>ジ</sup>姑<sup>コ</sup> 燕<sup>エン</sup>尾<sup>ビ</sup>草<sup>ソウ</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>イハ</sup>ふ<sup>フ</sup>



○形燕の尾は似たり。の根は白く  
こゝろ一根本歳は十二の子と生ぞ  
○沢溲をわがしめて古入乃  
俳借よもよもたり誤りあり

非 ○非 花のたより純子山嵐雪  
沢溲乃月影一雨や野童

河骨 萍蓬草 非 河骨や  
揉よふや多る夜半樂嵐雪

菱花 菱花 五六月小  
白花開く 夫木為家

舟とてたぐりも淋し青はる  
菱花の舟やほろろ人

詩 菱五字對句 同上

浅渚菱花亂 蟾影揺輕浪

深潭行葉疎 菱花映淺流

詩 同七字對句 詩礎

松葉正秋琴韻響 翻池上

菱花初曉鏡光寒 小池清

詩 菱花之詞 唐李嶠

鉅野韶光暮東平春溜通

影揺江浦月香引棹歌風

日色翻池上潭花發鏡中

五湖多賞樂千里望難窮

日ノ池上ニサシテ花ハカミノ中ヨリ生  
ズルヤウナ五湖ニハヒシノ多キ所ニテ千

里ノ眺望  
ヤムヲナン

蓮花 蓮花の葉  
白蓮 紅蓮 水芙蓉

異名 花君子 藕花 水花 風露郎

池見草 露路堪草 蓮ハ

泥より生して去るも清浄なり  
性糞溺を忌む周茂叔が云く

菊の花の隠逸あるもの牡丹の花の富貴あるもの蓮の花の君子あるものありと

◎丈治百首

西行

とちかふる月のひかりをせむは池よ  
ところろとえてれさうき蓮うる

夫木 蓮開水上紅 千里

秋近く荷をくくるあけうの

くれる井ふくく色ぞこころ

山家 蓮満池 慈鎮

とちかふる月やどるを渡りし

池よ蓮乃花とたふあり

詞 白の海の家すめ 風月蓮の蓮

羨れあはれらるる月 蓮はあふけ

中守 秋の蓮の露の露の上や

さあたるの池の中る 蓮はあふて

蓮のあはれを 池の海はあふて

蓮のあはれを 池の海はあふて

蓮のあはれを 池の海はあふて

蓮のあはれを 池の海はあふて

◎非出の蓮に歌れし蓮は其角

泥坊の教え水のしらとら 全

狂花瓶小しとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとらとら

もまうとらとらとらとらとら

生佛りや人といまう 種好

◎詩 蓮亭對句

同上

白蓮吹次缺

稻花千頃外

香藹坐来清

蓮葉兩池間

◎詩 蓮七字對句

詩礎

蓮花直撲青天色

渚蓮愁

玉女常含白雪愁

上蘭舟

波廻片々青蓮出

識采蓮

日落山々彩鳳飛

採蓮舟

① 採蓮

崔國輔

玉淑花爭發金塘水亂流

花サカリナル頃ハ水相逢畏相失

並著採蓮舟花サカリノ頃ヲノバ

サバ花ノチリ失ニイ

遊ニト舟ヲモヨホスナリ

② 又 明 申時行

碧沼停寒玉紅蕖映綠波

白紅ノ蓮花ガサキテミドリ粧凝

朝日麗香逐晚風多

出飛揚翠羽過

納涼依水榭還續采蓮歌

③ 曲池荷 盧照鄰

浮香繞曲岸圓顯覆華池

香氣紛紛トレテ岸ヲメグリ圓ナル花

ノカゲイケノオモテヲオホヒカシス

常恐秋風早飄零君不知

秋早ク花ヲチテヤブレ蓮ト今ニナラン

コヲ知ラスレテナカメタマハントナリ

○金絲蓮 紅花 金色の筋あり

甚ど珍なり○大紅蓮 花淡紅

色芭蕉の花ハ似たり花ありて

実のくす○天竺蓮 花紅干葉一

列よりく昼夜一がまず○蓮

ハ子の名なり菡萏ハ花乃名

ハナリ 菡萏の茎の名ナリ藕ハ

根の名ク荷ハ葉の名俗ワケナリ

④ 荷葉 浮葉と藕荷とハ

あつハ葉と荷とハ根と藕

とハ花を蓮とハ荷縫水芝

⑤ 夫木 定家

⑥ 連 夫木とハ夫木を連ハ風ハ

⑦ 排 排ハ水とのびるハ子ハ野馬

蓮は葉や雨のまじり地の水かき道之  
てす花を蛙のまじりまじりけり風光

狂君子とよみけり花のまじり葉に  
波の味ゆきけりみそ先く七貞古

詩 荷葉五字對句

同上

緑水飯香箱

依崖假松蓋

青荷包紫鱗

臨水羨荷衣

詩 全七字對句

詩礎

桃花尚憶當年宅

荷花香

荷葉堪為卒歲裳

聞菱荷

新荷 唐 李羣玉

田々八九葉散點緑池初

ハジメテ葉ヲ生ズ所々 嫩碧纒平

水圓陰已蔽魚 葉イニ女若葉

同シ然レモ丸キ葉ハ 浮萍遮不

合弱荇繞猶疎 二サヘキラレテ

合ヌアサ、ノ水クサモゾリテ 半在春

波底芳心卷未舒 二カバハ波

蘭花 虎鬚草 碧玉草 燈心草

夫木 川のみをきくや河名のおいそ

指を押し皮をさして燈心を

出さる凡六斤を燈心蘭

玉用よ入て刈きり 豊宜の表不用

ゆらひ備後と上品とす女のす

きて此業とせげむ一日ふ二枚

席草 是ハ琉球とつて同



青魚燈 酸漿 青蕃椒

俗は南蛮胡椒。又高麗胡椒と云。秀吉公伐朝鮮時渡る故名付り

藁荷子 俗は夏あつと夏めづる

凌霄花 異名紫葳。陵時

詩 凌霄花之詞 吳震三

素娥昔日宴仙家 素娥ハ仙女ノ名酒

醉裏從他寶髻斜 酒ニ

遺下玉簪無覓處 エフテ髪モカクフキタリ

如今化作一 髪ヨリカンザシヲオトシ尋レモハス

風蘭 挂蘭。仙草。風と好て茂る故に名づく

林花 今其カンザシガ化シテ此花ト咲出シト戯作レルナリ

非 風葉や風下 花黄

神馬藻 飭ハ歳旦より

豇豆 小角豆△青さげ△十

非 瓜 種類多し

甜瓜 瓜を上品とすこれふよ今

瓜 瓜の惣名とるなり京の東寺

瓜 瓜江戸の鳴子瓜尾州の音鷲

瓜 瓜を上下守駿河の府中根津

瓜 の水野和泉の堺舳の松これ

瓜 ら皆名と得

非 瓜 其角

瓜の瓶小温公よりや高菜瓜起波

狂々つきてらごうに海へ瓜白田

先へ瓜との瓶が仇まらる千栢

〇人く集りて万法の空也と法

問を出世し時寂蓮法師の御

空よかたへさしめあるくべいで

け瓜は皮も妙

瓜皮 松山侯の御前

うて瓜の句へ有べし皮よて發

句やよとありける時其角畏りて

非 瓜の皮も妙 流るる

# 白梵天

梵天瓜の瓜の種類にて白き

大和より出る皆白色なり

非 梵天の瓜や味も香もは桂葉

狂 名をまじふ瓜切らぬ瓜は

梵天瓜ぞよふ齋つかり高毒

詩 瓜五字對句

# 酒榼縁青壁

几攤梅福傳

瓜田傍緑谿園摘邵平瓜

瓜田傍緑谿園摘邵平瓜

瓜田傍緑谿園摘邵平瓜

瓜田傍緑谿園摘邵平瓜

詩 瓜七字對句 詩礎

羽扇揺風却珠片動金花

玉盤貯水割甘瓜鄭瓜州

青門堪種邵平瓜五色瓜

白社可容陶令酒故侯瓜

邵平秦ノ東陵侯タリシガ秦敗

レテ後布衣トナリテ瓜田ヲ作リ

シト 干瓜 白瓜を干したる

ナリ 干瓜 瓜を干して四五

出るといふ瓜は小くしてよ

瓜六七月出ると大きくして色青

瓜 瓜の名東陵も

瓜 瓜の名東陵も

瓜 瓜の名東陵も

瓜 瓜の名東陵も

瓜 瓜の名東陵も

瓜 瓜の名東陵も

りのことし、とす大坂の東黒門と  
つ入所ふ作る上品とす唐の青

門瓜上品とす又偶然なるもの  
非干瓜や、らふとすす餐小并其角

熟瓜 甜瓜の種類 菜瓜  
味少し、かろ

甜瓜の種を時て 南瓜 寛  
菜瓜ふ変する物有

の頃本朝へ種を得て長崎小作  
ふそ、諸国よ、もろまる形ち

丸く、な、南蠻より、  
とる、南瓜の名あり

南京瓜 南瓜と同種類之  
形び、と、

かぶらや唐のすび、と、  
地より其始出、と、

阿古陀瓜 是れ甜瓜の  
と、

と、煮、と、  
○南瓜の南京の阿古陀等夏の

季とも、又秋の季とも  
と通俗志其外多く秋と

出、の、花として夏は用ひ  
花と、として秋は用ひて可

る、ん、所存よ、  
れとも時珍が説は南瓜をど

ハ九月花ひ、き瓜と、  
とあり是、花として季小

五月と、  
の、記、

楮花 △紙を草の楮の制  
して紙、木あり

黒ひ、を、上紙、  
つ、防、

多く作る白ひ、青ひ、  
み、其外数品あり

○秋葵と、州あり楮と、別  
あり五月花咲、は、同一

紫蘇 赤蘇の挂、  
して食、大小二種あり

紫蘇 赤蘇の挂、  
して食、大小二種あり

紫蘇 赤蘇の挂、  
して食、大小二種あり

**蒜根** 夏よりてたく久食毒を  
解し悪瘡を灸す

**葫荽** 夏実をとり生さるの香を  
しとれし悪臭を去

香ありきものて食て後この物を  
少しくへん忽ちあき香をゆらん

**痘瘡** けがきを去る法 この実

をぞんとてワズよきげのたち

まら痘瘡の色 **精実** 粘日

あきとるを **精膠** 粘日

**精樹** の皮を剥き水よたぐら

春そくかき去りて制す

**夏切茶** 茶を賣處の家  
六月新茶を壺入

紙そくなく封じ壺を賣す

是を買ひ封を切て遣ふを

**種植** 此部は草木植る壅  
培収採るの事との事

**種植** 先月あるは分あ  
らひ今月も種べ

**茄子** 花の咲く  
法 時分その

葉を取りて四ッはよ捨るを

に丸く灰をかきわけ其上を

人はぬまに種しを

びたくさんよなるを

**壅培** 橙。たちむる等は芽の  
の灰羊の糞とつら

の実さる事おの。菊よ

土用の後ひぐしとかくべ

**灌水** 此月暑氣はよたゆ  
日中よ水とそくげ

かまろく晩よとそく朝

とやく水とそくぐへ

**収採** 麻苧。の燈艸。席艸。  
とげ右のか此月刈る

**生類** 此部は六月一ヶ月の  
生類のよめ

**燈蛾** 燭蛾。火蛾。飛蛾。形黃  
蝶に似て枯渴る云

蟬の諸聲

多くかきひきく

蟬脱

空蟬。蟬の皮とぬぎ

その皮とぬぎこゝに入ると又生

夏又虫

夏のよろくの虫と云

法よく火入よりの交りや

狂 夏は小あぶらのまゝとあ

残蠅 蠅の秋までものころあ

金龜子 蚊蟻 鳥毛虫

蝶 俗に水道蠅といふもの夏

齋 一名地虫又根掘虫。お

糞土中にも生じ

練雲雀 卵

かひ直下へともふ下ら手先

五六間も服旁よりさ

かへてみるれとあつたむるこ

のそれを練雲雀といふ

○一説は音をこゝろのこゝろ

鶺鴒鳥 たりふひむりとも

ひむりの羽とかゆりころ

川狩 等して魚とさう遊ふと

川物やさうさうと扱て物製

鯖鈎

青魚。其色青し故に鯖鈎。名づく大なるものと鱈

魚と名づく、和名あふさむとつくり海中にて釣るなり

海月取

海母れともかく仲正

我々の海の月をきまらむるくくげれあひにおよぶると

必用

此部より六月より月必入用の夏養生の法等と集む

破軍

暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
午の方	未の方	申の方
夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
酉の方	戌の方	亥の方
朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
子の方	丑の方	寅の方
昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
卯の方	辰の方	巳の方

時刻

未の日未の刻事とま日より

出行作事

東の方へ向いて

東は行くが故あり又西北の方へ行くは用捨あり味方として

西南の味方より利あり

樂事

詩も六月徂暑と

て見よの蓮の花も

雲起りて夕立のけりき一陣

天氣

當月の長雨ふる事すくふ雲出

雨を催せども天の陽氣つよぬ

東風よく朝あじしよの四ツ時

雲も晴れ照つゆく五穀豊熟

とそれより日暮まへより次第小  
 北へ替り北東風ふかるるを  
 夜北より昼の照つめと吹はぬ  
 露を吐く稲ふ甚よく此天氣  
 つく時小折々夕立 **風** 申酉  
 志て人病もよくは

吹を西まぜといふ日和つゞきて  
 よう○未申より吹を沖気と  
 り朝づゝ曇まど日和つゞ  
 志たふもる此日和長そものそ  
 其うちらとらう出せばそれより  
 晴るかたかり人未申沖より  
 雲をのびて雨とまうくして  
 つゞまふも長そをほくものそ  
 ○北西の風とあまざといふ雨ちづ  
 曇ど夕立もせど○東風は  
 けて吹ぶ雨ふるも夜露を  
 めげぬ○東北の風久しく吹  
 て空晴くると日和東風といふ

十日も北日も雨ちづ然れども  
 終い雨ふるるとあまざ○東北

東南の風して曇まど  
 湿氣にふる下地なり **雲** 南  
 西

小自ら雲出て東へまどまど  
 雲といつ晴天はぐさ夕立ると

志て稲 **朝霞** 東大日出を  
 小宜し

あうり久しき是ひぞうはぐ  
 ○朝東方あかく満天へうつり

あうり三日の内雨ちづ  
 まど朝やけと雨といふ **夕霞**

西赤く南へ廻まど日和し秋の  
 氣ふる北へまどとようし

久しき旱の後山谷と **占候**  
 かやすの翌日雨ふる

此月暑氣薄けまど五穀はら  
 かす蠶ふけまど新舊の米價貴

一○白雲北斗の下小横くれば  
 雨とまると月内西北風吹く稲ふ

批ひわうう〇今月西北風はくさきて  
 吹ふい日ひ和なり夕ゆふ立たしせず又この  
 風かぜのまは冬ふゆ河か凍こりて舟ふね通とひ  
 不ふ自由じゆうく〇二十七日二十八日辰たつみの刻  
 風かぜと主しゅる〇東風とうふう久くく吹ふと好このす  
 東風とうふうのと吹ふて夜露よるうをゆららす  
 稻いね生長せいじやうに  
 衣服いふく式しき  
帷子ゐしと着る  
袴はかまの浅黄せんわう  
 小紋こもん縫ぬ上下じやうげの畧りやく義ぎ緞じゆん子こ肩衣かたぎハ  
 嚴暑げんじゆと凌しのぐこらひて後製ごせいの  
 時衣ときぎ  
女郎花にようが  
衣ぎのこ青せい黄わう  
 青せい瞿麥きよくま  
 女衣服にょいふく  
朝日あさひ  
帷子ゐしを  
 嘉祥かじやう月げつ乃の祝儀しゆぎの地ち  
 生せい  
 花之式正はなのしきせい  
 養やう生せい

花之式正百合 養生

心旺しんわう腎衰じんすい精化しやうかして水みづと  
 るよくはいして腎氣じんきとかふ  
 冷水れいすゐして手てと洗せんふこと  
 五臟ござうをかふこむ沐浴みよく又また冷水れいすゐを  
 足あしと洗せんふことす風かぜにあららて卧ふ  
 病びやうの此こゝ月げつ小多せうたとい陽やうと受うく  
 癰うむ癩らいを發すこらうと云ふ  
 妙藥方めうやくはう 夏暑げあしのあららと  
中暑ちゆうしゆのい香薷散かうじゆさんと用もち  
 〇香薷かうじゆ厚朴こうはく白扁豆はくへんとう茯苓ふくけい各おの中ちゆう  
 〇老人虚人らうじんきよじんの清暑せいじゆ益氣湯いそきとうは  
 人參じんじん白朮はくじゆく麥門冬ばくもんとう五味子ごみし橘皮きつひ  
 甘草かんさう黃柏わうはく黃芪わうぢ當歸たうけい  
 〇霍亂かくらんのい霍香かくかう正氣散せいきさんと  
 〇時氣とききのい食傷じきやうと  
 〇枇杷葉湯ひたひたえつとう 〇藿香かくかう中ちゆう 我朮がじゆく中ちゆう  
 吳茱萸ぶしゆ小せう 肉桂にうけい中ちゆう 甘草かんさう小せう

冬月凍瘡と發せざる

妙術 當月とぐまて暑き日  
大蒜と油をこたからして

手只は塗きい冬、疥あらず  
と發せざる事 妙なり

厭患拔けの妙術 今月藜と  
取り黒焼

して石灰と砥石と右三品と合  
せ壺に入れて水と入米と入米の

ころりけりころり時あぶらう血と  
出づーはちて紙をくくこころー

鰻松明け法 蒲穂を二折  
油を塗り又

わいて油とめりて又二折すわら  
いころ事三四度して其上と

鰻の皮を巻き又油をめり  
わいて火をととせば雨中みも

消る事  
そいほ

六月飲食并料理献立

好温暖のりあつひのか  
物 きりのとろろふま宜し

禁生冷とくひのころとくひ。韭。  
物 野鴨。雁。あひと食へん水殺生を

養飯 水つちめえ△水飯ともかく  
△洗飯。飯と水と洗ひ食ふ

非あ飯よかひぬとまます  
瓜のまづくか其角 瀛鱈へせじ

精 △乾飯△引飯△冷水よひにて  
食ふ河内道明寺か作る物甚は

冷索麵 △冷麩。ゆでく冷水  
△冷索麵 ぶひのころたるり

狂は此をて李白よんらん索麩  
の思よりほく麩のあら系 梅子

瓊脂菜 石花菜△心太 俳 志ろ系  
のちねつと出せ心太 沽風

狂系のとれたらうてんやのつた  
價らんきの菜かりしな 遠舟



六月食物用意の品

将酉油造△納豆仕込△ひ

しは造△奈良漬製を

右の品々はとうとうつぎやう委  
しく日本歳時記といふ各々出さう

△水の粉 △葛粉水△砂糖水△  
振舞水△いもも夏の物

△麻地酒 ○暑中△呑酒さう  
美濃。豊後又い南

都よりし出る浅茅酒とていふ  
能辨てなぬまぐべと持たはるる

干瓜の法 瓜とニツよ割り  
中子と去りハ

丸分やど塩と入し一夜をーと  
うけそれた明日取り出ー上

下々小おろしー干茄子法  
日又干まぐー

て煮る 豇豆塩漬乃法  
米糍一斗小塩四升合せワラ

さくげとてなぬまぐべと持たはるる  
く損やど茄子と 甜瓜と

又此如くすまよし  
久敷貯入法 打綿と箱ヤ  
うの物よ入

其中へ瓜をつみ蓋を能くして  
つこぬこめさけが百日の持さう

尤土用 瓜茄子の類年  
の瓜は

中貯法 寒の中の潮を盛  
入たくり夏

瓠瓜茄子の類を漬さけの色  
うらぶすして久しく持つ潮の渚

より五六丁も沖の潮より江  
いさわうみけよくして悪く

甜瓜年中貯入極秘傳

随分大瓜の蒂より頭よはきお  
たのぞくは着て穴をあけ其口が

明礬と二与をく入木灰も批半  
今まをよと都合一斗をくハ塩二

升入るけりりくを漬置キ桶よ  
てまづがくをく口をく風の入

ぶらやうのくをく今日漬をく  
九月より未勝手ふ出してつて

べい味ひいさくま 酸将水子  
攪むる事ふく

と貯法 色好赤くると枝と  
りん土用の井の水ふ

漬をく秋よ至て又水と替べい  
かくのくすれが外の売紗は如

透通してやうづき少く 夏月  
も皺よばくをく

氷と寒中は如く捲る

法 銅の器小厭すを泌りくる湯  
をく入口を能けり水は入らぬ

ゆりみで井の底へおりくと付て  
沉め半日一日や置て取上る

寒中水は火くかり守夏の  
内煮凍と捲る小葛粉もど用ふ

及びく五極よ 又法 つが水と  
く出来るる

口として金も湯と泌らし其内へ  
入るを湯玉のく時取上て井

戸の中へ入る 青瓜越瓜

年中貯法 瓜を四割小  
して塩をぬ

てくし一日置てのら新酒乃  
樽よ詰り張る置ハ年中変

らと時分の生吐 加子瓜  
如くくしきり

大角豆青漬法 五升塩

二升右二品りを合せ瓜大角豆

青々として生かす但 白瓜

翌年まで青く貯置

法 赤土一鉢 塩六ホ五合右赤

取合と合せ白瓜二ツ中ごこと能く右の土めて

つち置き夏者火

凍法 鯉其外

精進物又ハ醬

煮て鉢水は冷置て

魚肉久敷貯法

の中へ胡麻の油を火入置ハ

煮熟物臭カ

法 煮何

置口いろ

底其者碗

越臭く先

鍋熱く味

揚若者味

唐納豆の法

京福

寺納豆とく土用前より麥一斗  
 大豆一斗麥とを蒸し大豆の  
 焚二品を能とを合せ土用の内  
 小能の種をて四五日晴天よ乾  
 白を挽くはむも挽く  
 繭ぶるはむけぬるはむとて土  
 用中よ水ハキに塩二斗煮之  
 して能とを此水とて右の粉と  
 ませ少くは入てあひるなり  
 あひる小口傳わり少くづ入て  
 ざらくよこの合せにざらくも  
 ざらくよのり加減ありや  
 らうなるは悪し是を白よ入て  
 けと桶入して七日置て又つく  
 又七日めくふつた以上七度つて  
 八九月の頃よるはるその時取  
 出して日はし黒く色付やふ干わ  
 げてはかき木の葉と上下ふと右の  
 納豆とだんご程よらひしてうへくの  
 づまひて上よりあひるをかけるなり

